氷見市埋蔵文化財調査報告第56冊

中村城跡Ⅰ・森寺城跡Ⅱ

２０１０年３月

氷見市教育委員会

巻首写真1　中村城跡（南から）

巻首写真2　中村城跡Ａ郭から南方を望む（中央右手奥は宝遠山）

巻首写真3　森寺城跡大手道（西から）　左手前と奥のポール間が北側石垣の位置

巻首写真4　森寺城跡大手道（北から）

氷見市埋蔵文化財調査報告第56冊

中村城跡Ⅰ・森寺城跡Ⅱ

２０１０年３月

氷見市教育委員会

序

東に富山湾を隔てた霊峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

能登と国境を接する氷見は、軍事的に緊張することが度々あったと考えられ、室町時代には数多くの山城が市内に築かれました。そしてその城跡が今も面影を残し、中世という時代を偲ばせております。

氷見市ではこれらの山城のうち、主要なものについて調査を推し進めるべく、主要城郭調査事業を立ち上げ、平成13・14年度には飯久保城跡、平成15・16年度には千久里城跡の調査を実施し、それぞれ報告書を刊行いたしました。

今回は、平成19～21年度の３ヵ年に実施した中村城跡と森寺城跡について、報告をするものであります。

中村城跡は、その縄張りに地域では類例の少ない畝状空堀群が採用されているのが特徴であり、越後上杉氏の支城として知られている山城です。

一方森寺城跡は、市内最大規模の山城であり、やはり越後上杉氏の支城として使用されたのち、織田方の佐々成政によって中心部が石垣をもつ縄張りに大改修されたと考えられています。

戦国大名上杉謙信ゆかりの両城につきまして、このたび新たな知見を得ることができましたことは、地域の歴史を知る上で貴重な成果であると思います。

主要城郭調査事業は本年度をもってひとまず終了いたしますが、先の２冊とともに本書が今後の保存・活用の基礎資料として資するところがあれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたりましては関係者の皆様をはじめ、多くの方々にご指導、ご協力を賜りました。この場を借りまして、厚くお礼申し上げます。

平成22年３月

氷見市教育委員会

教育長　前辻　秋男

例　言

1　本書は、氷見市教育委員会が平成19年度から21年度の３ヵ年にわたって実施した、中村城跡と森寺城跡の調査報告書である。

2　調査費用は、国庫補助金と県費補助金の交付を受けた。

3　調査事務は氷見市教育委員会生涯学習課が担当した。担当者は以下の通りである。

平成19年度：課長定塚信敏、課長補佐中谷英夫、主査大野究、学芸員廣瀬直樹

平成20年度：課長廣瀬昌人、副主幹鈴木瑠麿、副主幹大野究、学芸員廣瀬直樹

平成21年度：課長寶住哲郎、副主幹鈴木瑠麿、副主幹大野究、学芸員廣瀬直樹

4　調査及び本書の執筆・編集は、廣瀬の協力を得て大野が担当した。

5　測量業務は、日本海測量株式会社（中村城跡、平成19・20年度）と朝日コンサルタンツ株式会社（森寺城跡、平成21年度）に、空中写真撮影は株式会社エイ・テック（中村城跡、平成19年度）に委託した。

6　調査参加者は次の通りである。

発掘作業員：横田清、山下巽、瀬戸国男、川上俊雄、山下進、小島忠夫（以上、氷見市シルバー人材センター、平成21年度中村城跡）

整理作業員：三矢惠京、日南静

7　本書には平成16年度に氷見市教育委員会が実施した森寺城跡発掘調査の成果をあわせて収載した。

8　調査成果に関する資料は、氷見市立博物館が保管している。

9　調査と本書作成にあたって、下記の機関・個人から多大なご教示・ご協力を得た。記して感謝申し上げる（敬称略）。

富山県教育委員会生涯学習・文化財室、富山県埋蔵文化財センター、高岡徹（とやま歴史的環境づくり研究会代表）、中井均（城郭研究家）、千田嘉博（奈良大学）、佐伯哲也（城郭研究家）、西井龍儀（氷見市文化財審議委員）、宮田進一（富山県埋蔵文化財センター）、中村地区（橋本忠彦、橋本昭雄、垣内精英、川江義昭、栗屋清）、森寺地区（河端政広、堀口正、坂井芳夫）、尋・湯山会

※森寺城跡の草刈りや現地ガイドを行うボランティア団体「尋・湯山会」の会長として、城跡の保存・活用に取り組まれ、測量・発掘調査にも積極的にご協力いただいた山口納夫氏は、平成19年12月14日に逝去されました。この場を借りてご冥福をお祈り申し上げます。

目　次

第１章：調査に至る経緯 …… 1

第２章：遺跡の環境 …… 2

第１節：遺跡の地理的環境 …… 2

第２節：遺跡の歴史的環境 …… 2

第３章：中村城跡の調査成果 …… 5

第１節：調査前の知見 …… 5

第２節：測量調査 …… 5

第３節：発掘調査 …… 9

第４章：森寺城跡の調査成果 …… 18

第１節：既往の調査 …… 18

第２節：測量調査 …… 21

第３節：平成16年度の発掘調査 …… 21

第５章：まとめ …… 26

参考文献 …… 30

報告書抄録 …… 巻末

図 目 次

第１図　周辺の主な遺跡 ……4
第２図　中村城跡周辺平面図 ……6
第３図　中村城跡平面図 ……7
第４図　中村城跡トレンチ配置図 ……10
第５図　中村城跡トレンチ（１）……11
第６図　中村城跡トレンチ（２）……12
第７図　中村城跡トレンチ（３）……13
第８図　中村城跡トレンチ（４）……14
第９図　中村城跡トレンチ（５）……15
第10図　中村城跡トレンチ（６）……16
第11図　中村城跡出土遺物 ……17
第12図　森寺城跡平面図 ……19
第13図　森寺城跡平成21年度測量地区平面図 20
第14図　森寺城跡トレンチ配置図 ……22
第15図　森寺城跡トレンチ（１）……23
第16図　森寺城跡トレンチ（２）……24
第17図　森寺城跡出土遺物 ……25
第18図　中村城跡と池田城跡 ……27
第19図　森寺城跡大手道想定平面図 ……28
第20図　森寺城跡南側の竪堀 ……29

図 版 目 次

巻首写真１　中村城跡（南から）
巻首写真２　中村城跡Ａ郭から南方を望む
巻首写真３　森寺城跡大手道（西から）
巻首写真４　森寺城跡大手道（北から）
図版１（１）中村城跡遠景（西から）
　　（２）中村城跡空中写真
図版２（１）Ⅰ－１トレンチ（西から）
　　（２）Ⅰ－１トレンチ穴１（南から）
　　（３）Ⅰ－１トレンチ穴２（北から）
　　（４）Ⅰ－２トレンチ（南から）
　　（５）Ⅰ－２トレンチ（北から）
図版３（１）Ⅰ－２トレンチ（東から）
　　（２）Ⅰ－２トレンチ（西から）
　　（３）Ⅰ－２トレンチ穴３（西から）
　　（４）Ⅰ－２トレンチ穴11（北から）
　　（５）Ⅰ－２トレンチ穴４・５（西から）
　　（６）Ⅰ－２トレンチ穴７（西から）
図版４（１）Ⅱ－１トレンチ（北から）
　　（２）Ⅱ－１トレンチ（南から）
　　（３）Ⅱ地区（Ｅ郭）から南方を望む
図版５（１）Ⅲ－１トレンチ（西から）
　　（２）Ⅲ－２トレンチ（西から）
　　（３）Ⅲ－３トレンチ（西から）
　　（４）Ⅲ－４トレンチ（西から）
　　（５）作業風景（Ⅰ地区・東から）
　　（６）作業風景（Ⅲ地区・北から）
　　（７）出土遺物（内面）
　　（８）出土遺物（外面）
図版６（１）大手道の石垣（西から）
　　（２）調査区遠景（北から）
図版７（１）2004－１トレンチ（西から）
　　（２）2004－２トレンチ（北から）
図版８（１）2004－１トレンチ（北から）
　　（２）2004－１トレンチ（南から）
　　（３）2004－２トレンチ（北から）
　　（４）2004－２トレンチ（西から）
　　（５）2004－２トレンチ（北から）
　　（６）2004－２トレンチ（南から）
　　（７）出土遺物（外面）
　　（８）出土遺物（内面）

第1章：調査に至る経緯

南北朝期や戦国期、越中国と能登国との間では、軍事的に緊張する場面がしばしば生じている。そして、能登と接する氷見地域は、越中で最もその影響を受けた地域といえる。

氷見市には伝承地を含めて、大小50箇所近くの山城が確認されている。これら一つ一つが、地域の歴史を知る上で貴重な文化財であるといえよう。

市内の山城のうち、県指定史跡阿尾城跡については、氷見市が昭和56年度に用地買収を行い、同59～平成4年度にかけて断続的に測量調査・試掘調査を実施した。現在地元では「阿尾城跡に集う会」が結成され、市民の憩いの場や観光名所として活用されているところである。

一方、市指定史跡森寺（湯山）城跡については、平成7年度の予備調査を経て、同8～13年度に測量調査を実施し、断続的に試掘調査を実施しているところである。また、地元では「尋・湯山会」が結成され、草刈りや城跡解説などのボランティア活動が行われている。

また、国人三善氏の居城として知られる小浦（池田）城跡は、詳細な調査は行われていないが、近年地元の人たちによって簡易な整備が行われている。

しかしながら、市内の丘陵の多くは、里山として人々の営みと今も深く結びついており、そこに点在する山城の周辺に、開発の手が及ぶことも多い。

そこで氷見市では、上記に加えて他の主要な山城についても、測量等の調査により基礎的な資料を得て、今後の保護・活用に役立てる方針を立てた。

調査は、まず平成13・14年度に飯久保城跡、続いて平成15・16年度に千久里城跡について実施した。

飯久保城跡は、市南部の飯久保地区に所在する国人狩野氏の居城である。主郭背後の大規模な土塁や織豊系の虎口などが特徴となる縄張りである。試掘調査では、戦国期の土師器や越前・染付・茶臼などが出土した。また地元では「飯久保城発伸の会」が結成され、隣接する丘陵とともに整備された。

千久里城跡は、市中央部の中尾・泉・上田地区に所在し、国人鞍河氏の居城と推定される。山頂の見張台下に三つの郭を連続させた大規模な縄張りである。試掘調査では戦国期に主郭周囲の空堀が改修されていることが判明した。

そして平成19～21年度には、本書で報告する中村城跡について、測量調査と試掘調査を実施した。

また、森寺城跡では測量範囲外において、新たな遺構が次々と発見されており、平成21年度には、このうち金戸山南側地区について、追加測量を実施した。平成16年度の試掘調査の報告とあわせて、その成果を本書で報告する。

第２章：遺跡の環境

第１節：遺跡の地理的環境

氷見市は富山県の西北部に位置し、日本海に突き出した能登半島の付け根東側にあたる。昭和27年の市制施行から同29年までに、太田村を除く旧氷見郡１町17村が合併し、現在に至っている。面積は約230㎢、人口は約５万４千人である。

市域は、南・西・北の三方が標高200～500mの丘陵に取り囲まれ、東側は長さ約20kmの海岸線で富山湾に面している。丘陵の大部分は、風化しやすく崩れやすい新第三紀の軟岩、とりわけ泥岩から成り立っており、地滑りが頻繁に発生している。現在丘陵中腹部にみられる集落や水田の多くは、地滑りで生じた緩斜面を開発したものである。

市北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流から成る谷地形であり、上庄川以外ではまとまった平野が少ない。

市南半部は、丘陵部に加え縄文海進以後の堆積により形成された、平野と砂丘から成り立っている。その過程で布勢水海と呼ばれる潟が生じ、現在は細長い十二町潟としてその痕跡を留めている。

中村城跡は、上庄川中流左岸の丘陵上に所在する。上庄川は市南西端の大釜山（501.7m）を水源とし、約22kmで富山湾に注ぐ河川である。

城跡が立地するのは、水源から北上して流れる上庄川が、東へ流路を転ずる地点にあたる。城跡からは上流域の谷を南に、下流域から富山湾までを東に望むことができる。

森寺城跡は、阿尾川中流左岸の丘陵上に所在する。阿尾川は石川県との境に位置する市最高峰石場山（513m）を水源とし、約11.5kmで富山湾に注ぐ河川である。

城跡が立地するのは阿尾川流路のほぼ中間点にあたり、川が狭隘な谷から平野へ抜ける直前の地点に位置する。城跡からは東南方向への視界が開け、氷見市街をはじめ、射水市・富山市の海岸部までを見通すことができる。

第２節：遺跡の歴史的環境

中村城跡と森寺城跡の歴史的環境については、第１図に掲載した主要な遺跡を元に記述する。

中村城跡が所在する上庄川中流域は、弥生時代終末期から遺跡が増加し、平野周辺の丘陵尾根には、古墳時代に数多くの古墳が築造されている。

この地域の代表的な古墳として、泉１号墳（円墳、45m）、中村天場山古墳（前方後円墳、32m）などがあり、発掘調査が行われた中期のイヨダノヤマ３号墳（円墳、20.5m）では、埋葬施設から短甲、鉄刀、鉄鏃、鉄矛が、墳丘から須恵器・土師器が出土している。同じく加納南９・10号墳からは、挂甲、鉄刀、鉄鏃、鏡、鉄斧、須恵器などが出土している。この地域は、古墳時代を通して質・量ともに氷見市でもっとも古墳が卓越する地域であり、安定した農業基盤を背景として、有力な首長が輩出していたと考えられる。

その様相は古代にも受け継がれ、８世紀初めには小窪地区に本格的な伽藍を備えたとみられる小窪廃寺が建立されている。万葉集にはこの地域の有力者で射水郡大領の阿努君広島が登場しており、小窪廃寺は阿努氏の氏寺である可能性が指摘されている。古代ではその他、新保南遺跡、新保野際遺跡などがある。

中世集落の様相は不明な点が多いが、散布地として柿谷大口遺跡などがある。

滝尾山遺跡は、「中世に四十八の寺坊があり、上杉謙信の兵火で廃絶した」との伝承が残る場所である。山中には真如坊、月光坊、金剛坊、慈相坊、明坊などの地名が残る。遺跡内では過去に土師器、珠洲、石造物、銅銚、古銭、太刀などが発見されている。

一方、中村城跡周辺の主要な山城として次の二つがある。

水谷城は南北朝期、能登守護勢の夜襲によって奪われた桃井氏方の陣城であるが、現状の遺構から戦国期の改修が推定されている。

千久里城も南北朝期の越中側拠点のひとつであるが、戦国期に大きく改修され、国人畝河氏の居城として使用されたと考えられる。

森寺城跡が所在する阿尾川流域は、下流の平野部においては古墳時代から開発が進み、古代・中世にも多数の遺跡が分布しているのに対して、中流域では遺跡がほとんど確認されていない。

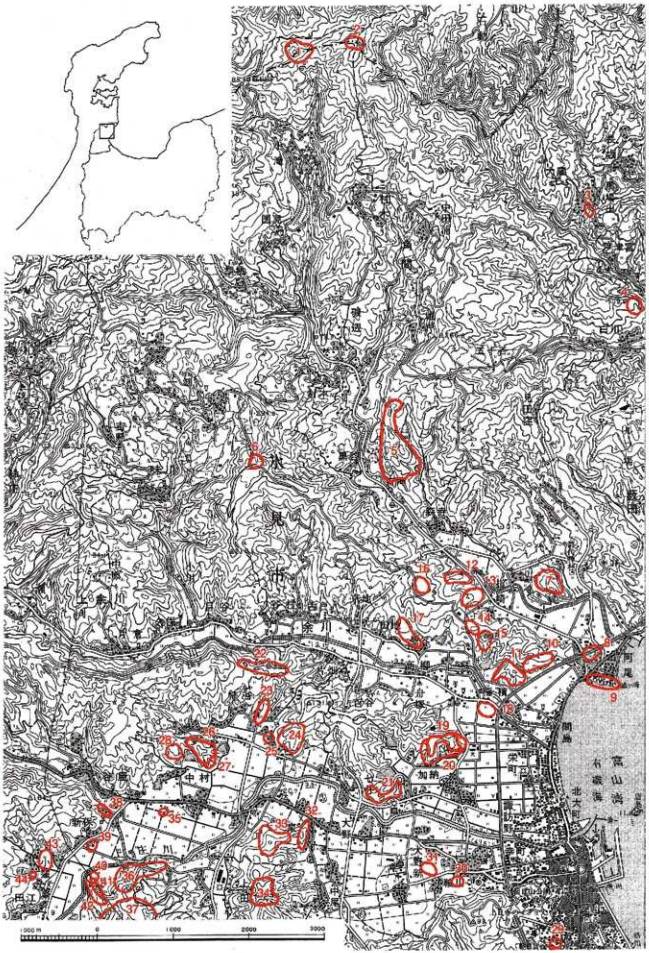
ただ、阿尾川流域（八代谷）には、国境の荒山峠を介して越中と能登を結ぶ街道が通っていた。戦国期にこの荒山街道は重要な役割を担っていたと考えられ、街道沿いには森寺城のほか、阿尾城（氷見市阿尾）、荒山城（氷見市小滝・中能登町芹川）、勝山城（中能登町芹川）が築かれている。

阿尾城は、富山湾に面した独立丘陵に築かれている。元々は阿尾川下流域の八代保を拠点とした国人八代（屋代）氏の居城であったが、戦国期末には九州肥後から移ってきた菊池氏が居城していた。城の北側には城下町も形成されている。

荒山城は荒山峠東側の国境沿いに築かれており、戦国期末には山岳信仰の一大拠点である石動山天平寺の出城であった。石動山衆徒は本能寺の変直後、上杉勢と共に荒山城に立て籠もり、織田方に対抗しようとしたが、前田利家と佐久間盛政の攻撃を受けて敗退し、その余波で石動山も炎上した。

周辺の主な遺跡（第１図参照）

1：荒山城跡（中世）
2：石場山城跡（中世）
3：千人塚（中世）
4：白河城跡（中世）
5：森寺城跡（中世）
6：芝峠城跡（中世）
7：八代城跡・八代西城跡（中世）
8：阿尾島尾Ａ遺跡（縄文時代・古代・中世）
9：阿尾城跡（中世）
10：阿尾島田古墳群（古墳時代）
11：稲積オオヤチ古墳群（古墳時代）
12：指崎大谷古墳群（古墳時代）
13：指崎向山古墳群（古墳時代）
14：稲積城ヶ峰古墳群（古墳時代）
15：稲積城跡（中世）
16：海老瀬城跡（中世）
17：余川金谷古墳群（古墳時代）
18：稲積川口遺跡（古代）
19：加納鮭子山古墳群（古墳時代）
20：加納横穴群（古墳時代）
21：加納南古墳群（古墳時代）
22：水谷城跡（中世）
23：柿谷権木出遺跡（不明）
24：柿谷土谷山古墳群（古墳時代）
25：柿谷大口遺跡（中世）
26：中村城跡（中世）
27：中村横穴群（古墳時代）
28：中村栗屋古墳群（古墳時代）
29：朝日貝塚（縄文時代～中世）
30：鵜川Ｄ遺跡（中世）
31：鵜川中Ｂ遺跡（弥生時代）
32：泉往島古墳群（古墳時代）
33：泉古墳群（古墳時代）
34：千久里城跡（中世）
35：中村天場山古墳（古墳時代）
36：イヨダノヤマ古墳群（古墳時代）
37：滝尾山遺跡（中世）
38：新保城跡（中世）
39：新保野際遺跡（古代）
40：新保南遺跡（古代）
41：新保横穴群（古墳時代）
42：速川神社古墳群（古墳時代）
43：小窟廃寺（古代）
44：小窟瓦窯跡（古代）



第1図　周辺の主な遺跡

第３章：中村城跡の調査成果

第１節：調査前の知見

中村城跡（中村山城跡）は中世の史料には登場せず、近世地誌類においてわずかに金沢市立玉川図書館所蔵加越能文庫の『三箇国古城（古城考五種の内）』に「中村　長尾左馬助」、同じく『三州地理雑誌』に「中村山城　越後侍之由長尾左馬助」と記されるぐらいである。地元でも、丘陵上に城跡が所在することは古くから認識されていたようであるが、詳しい歴史や内容についてはほとんど知られていない。

中村城跡に関するまとまった調査成果は、氷見高校歴史クラブによるものが最初である（氷見高校歴史クラブ1961）。城跡の立地上の特徴と、わずかに伝わる史料や伝承がまとめられ、主要部の略測図が添えられている。

その後、中村城跡に関する研究は途絶えていたが、平成４年に佐伯哲也氏が詳細な縄張り図を発表し、その特徴的な縄張りとして、越中の山城では類例が少ない畝状空堀群[注1]をもつこと、計画的な城内通路が配置されていることに注目し、戦国末期の城として位置づけた（佐伯1992）。

次いで高岡徹氏も詳細な縄張り図を発表し、大規模な堀切と切岸で守られた山上の郭群と畝状空堀群に注目した。そして城主と伝えられる長尾左馬助について、永禄12年（1569）10月、越中国新川郡支配のため上杉謙信によって魚津・松倉両城に配された河田長親に与力として加えられた越後国古志郡栖吉（すよし）衆の一員に名前があること、畝状空堀群も上杉系の築城技術として読み取ることができることから、中村城を上杉氏の越中在番体制の一環として論じた。さらに城の時期を、謙信が氷見地域を支配下に置いた天正４年（1576）から、謙信死後織田方によって氷見地域の上杉勢が排斥された同７年までと位置づけた（高岡2000・氷見市教委2001）。

また佐伯氏は近年、新たに城の西側で確認した遺構を紹介するとともに、周辺地域の山城との縄張りの比較検討から、畝状空堀群に加えて虎口や通路を設けた中村城跡の改修・使用時期が、上杉景勝期の天正６年（1578）から同７年に絞り込める可能性を指摘した（佐伯2008）。

これらの成果から、中村城跡は越中国内における代表的な上杉氏の支城のひとつとしてその特徴的な縄張りが評価され、広く知られるようになっている（富山県埋文セ2006・富山県教委2009）。

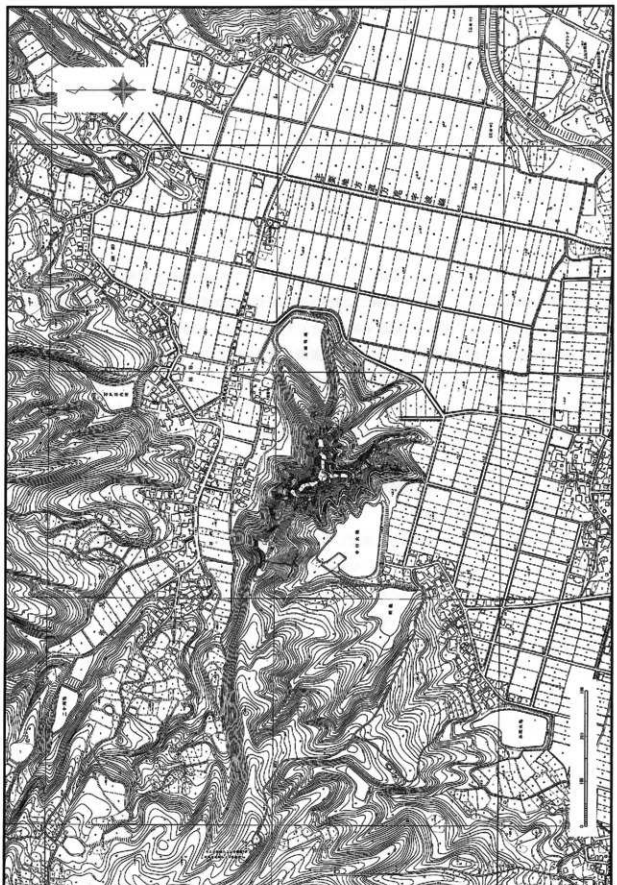
第２節：測量調査

測量調査は、平成19・20年度の二ヵ年に分けて、城跡全体の平面図を作成した。作成業務は業者委託とし、原図の縮尺は１／500、等高線間隔は１ｍである。

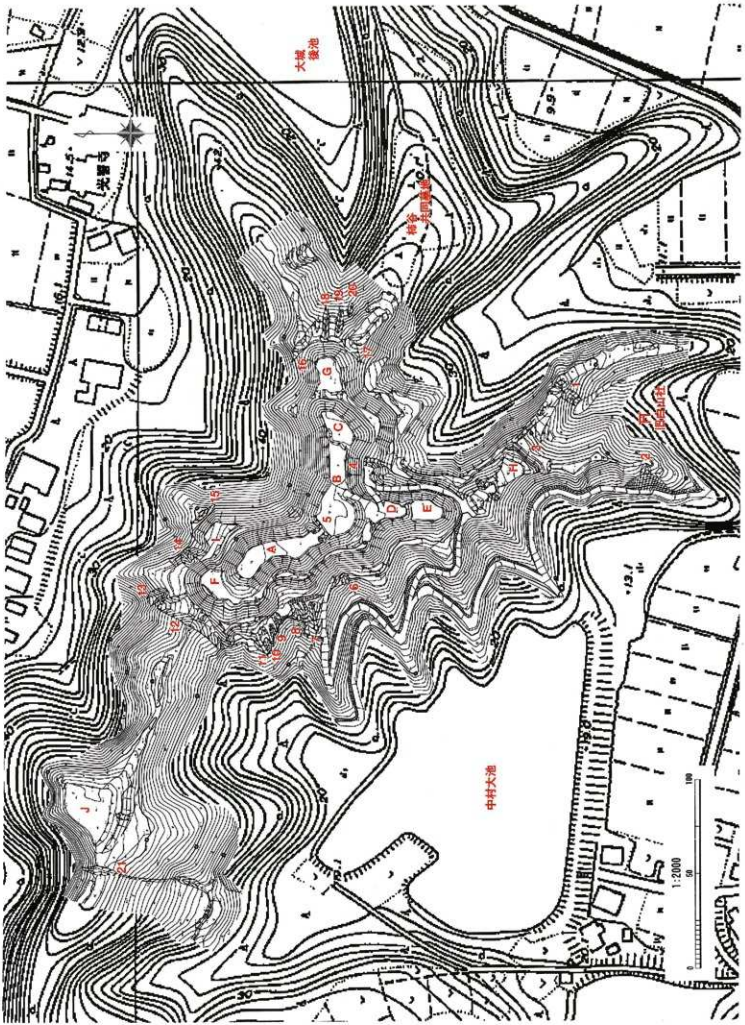
以下、測量成果からうかがえる遺構について、新たな知見を加えて示したい（第３図）。

中村城跡の範囲は、南北約350m、東西約400mに及ぶ。

城跡が立地する丘陵は、小さな谷地形が複雑に入り組み、それに応じたやせ尾根が連接する場所である。丘陵の南麓は中村地区、北側は柿谷（かきなす）地区にあたり、丘陵裾西側に中村大池、東側に大城（だいじょう）後池がある。中村大池は文化年間築造、昭和49年改修であり、大城後池は宝暦年間頃築造、昭和49年改修である（奥村2002）。また、城跡東側丘陵上にある墓地は、明治中頃からの柿谷地区共同墓地であり、昭和35年頃まで使われた地区の火葬場もここにあった（新湯大民俗研1997）。ちなみに、昭和28年12月氷見市に合併するまで、中村地区は熊無村、柿谷地区は上庄村に属しており、この丘陵上に村境が通っていた。さらに城跡南側の谷には、明治42年１月春日社（以後中村神社に改称）に合祀されるまで、白山社が鎮



第２図　中村城跡周辺平面図



第３図　中村城跡平面図

座していた（熊無村史編集委1997）。

山上には郭A・B・Cが連なる。このうち主郭と考えられるのは、城内で最も標高の高いA郭である。A郭の標高は68.24mであり、平野との比高差は約55mである。A郭は南北46m東西9mの細長い形を呈し、南側で竪堀5と土塁による土橋状通路によってB郭と接する。B郭は東西46m南北9～20mの郭であり、中央南縁に通路が設けられ、高低差約1mの緩い段差でC郭と接する。C郭は東西15m南北10mである。

城への出入りは、南にむけて延びる二つの尾根が利用されたと考えられる。西側の尾根が竪堀1本により防禦されているのに対し（2地点）、東側の尾根は土塁状の高まりと尾根両側の竪堀によって、より厳重な防禦になっている（1地点）。二つの尾根はH郭の南裾3地点で収束するが、ここには土塁が設けられている。主郭への通路は、ここからさらにH・E・D郭の東裾を進み、突き当たりで左に折れD郭へ進入し、さらにB郭へ入るルートである。この間、各郭から横矢が効く仕組みとなっており、D郭入口で東に回り込む場合は、竪堀4で食い止められることになる。D郭は南北20m東西9m、約3mの段差で南側に南北16m東西10mのE郭が所在する。両郭間には東側にスロープ状の通路が設けられている。H郭は南北30m東西9mのやや傾斜した郭であり、北寄りに竪堀による土橋状の防禦施設がある。

主郭であるA郭周辺は、最も厳重に防禦が施されている場所である。E郭裾から西側に回り込む場合、竪堀6さらには7～11の畝状空堀群によって食い止められる。これら畝状竪堀群は、中村大池北側の谷からに対する防禦も担っている。D郭から西に回り込む通路は、A郭下に一部土塁が設けられており、竪堀7・8に対峙している。そこからさらに北へ向かうと、F郭に突き当たる。F郭下には西側尾根との間を切断した大堀切12があり、堀底には土橋が設けられている。F郭東下にはI郭が設けられ、堀切15や竪堀14とともに北東からに対する防禦となっている。

城の東側は、C郭の東側に約5mの切岸で東西18m南北10mのG郭がある。切岸下の堀切には土橋が設けられている。G郭の下には二つの尾根それぞれに堀切16・17が設けられ、間の谷には畝状空堀群18～20がある。

堀切12から西へ約80mの地点にJ郭があり、その西尾根に堀切21がある。この堀切の南側は約50mにわたって、一部竪堀状に段差が続く。J郭は中村城の他の縄張りと比較すると、防禦性に乏しく、その違いが時期的なものか性格的なものかは不明である。

さて、今回の測量調査の成果を受けて、改めて遺構の状況を検討した結果、新たな知見として搦手通路の存在が浮かび上がった。主郭周辺の縄張りでA・F郭の真北にあたる竪堀13・14間の尾根だけは、堀切等の防禦施設がなく、柿谷地区からF郭北の切岸下まで容易に登ることができるのである。むろん敵が侵入した場合は、竪堀13・14が左右への移動を担み、F郭からの攻撃によって十分に防禦ができる縄張りである。そして城方がこの尾根を利用すれば、主郭から最短距離で一気に城下まで下りることができるのである。なお、柿谷地区には中村城に毎日清水を運び上げていたという伝承がある（氷見高校歴史クラブ1961）。伝承の真偽はともかく、中村城は大手を中村地区側に向けるとともに、搦手で柿谷地区とも結びついていた城であったといえよう。

第３節：発掘調査

発掘調査は平成21年６月26日から８月６日まで、実働11日間実施した。

調査の目的は、測量調査の補足として縄張りをより正確に把握するため、主要部の遺構残存状況や、畝状竪堀群の構造を確認するためである。

中村城跡の中村地区側の広い範囲では、測量調査に取り掛かる直前の平成19年春に、業者が樹木の伐採を行っており、調査を予定した平成21年には特に南側斜面において植物が新たに繁茂し、足を踏み入れるのが困難な状態になっていた。

そこで調査対象地を、Ⅰ地区（A・B郭）、Ⅱ地区（E郭）、Ⅲ地区（竪堀７・８）とし、幅１ｍのトレンチを設定し、発掘を行った。調査面積は、Ⅰ－１トレンチ31㎡、Ⅰ－２トレンチ23㎡、Ⅱ－１トレンチ14㎡、Ⅲ－１～４トレンチ各２㎡であり、全部で76㎡である。

Ⅰ－１トレンチは、B郭東側の遺構の有無や残存状況を確認するために設定した。ここは大手から主郭へ向かう通路の役割も果たしており、合わせて縄張り上の性格を把握することも目的とした。

調査の結果、表土から深さ20～40cmでにぶい黄橙色の地山を検出し、確認できた遺構は穴１と穴２の２基のみである。

穴１は一部調査区外にかかるが、一辺40cmの方形を呈し、深さは21cmである。

穴２も調査区外にかかるが、40×50cmの方形を呈し、深さは15cmである。共に柱穴とすれば、両者の方位は20°ずれており、複数の建物があったと考えられる。

Ⅰ－１トレンチからの出土遺物はなかった。

Ⅰ－２トレンチは、A郭北側の遺構の有無や残存状況を確認するために設定した。ここは中村城跡縄張りの最奥部に位置する極めて重要な空間と考えられ、その実態を把握することを目的とした。

調査の結果、表土から20cmほどで浅黄橙色の地山泥岩質岩盤を検出した。このA郭では、岩盤を平坦に削りだして郭を普請していると考えられる。遺構としてこの岩盤を掘削した11基の穴を検出した。

穴３は長径160cmの楕円形を呈し、深さは100cmである。３層目の青灰色砂質土に炭化物が多く含まれる。穴４は長径90cmの楕円形を呈し、深さは40cmである。

穴５は長径120cm、短径65cmの楕円形を呈し、深さは60cmである。

穴６は長径約120cm、短径80cmの楕円形を呈し、深さは70cmである。

穴７は長径160cmの楕円形を呈し、深さは70cmである。

穴８は木根のため未計測である。

穴９は一辺170cmの方形を呈し、深さは110cmである。

穴10は一辺60cmの方形を呈し、深さは55cmである。

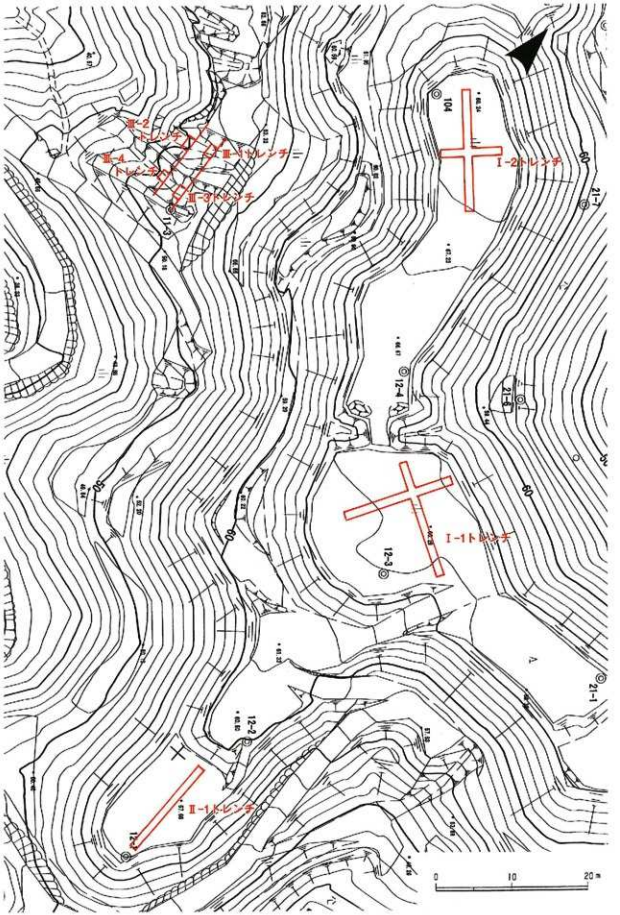
穴11は一辺100cmの隅丸方形を呈し、深さは110cmである。

穴12は38×15cmの隅丸方形であり、深さは27cmである。穴13は50×30cmの楕円形を呈し、深さは30cmである。

出土遺物は２点である。

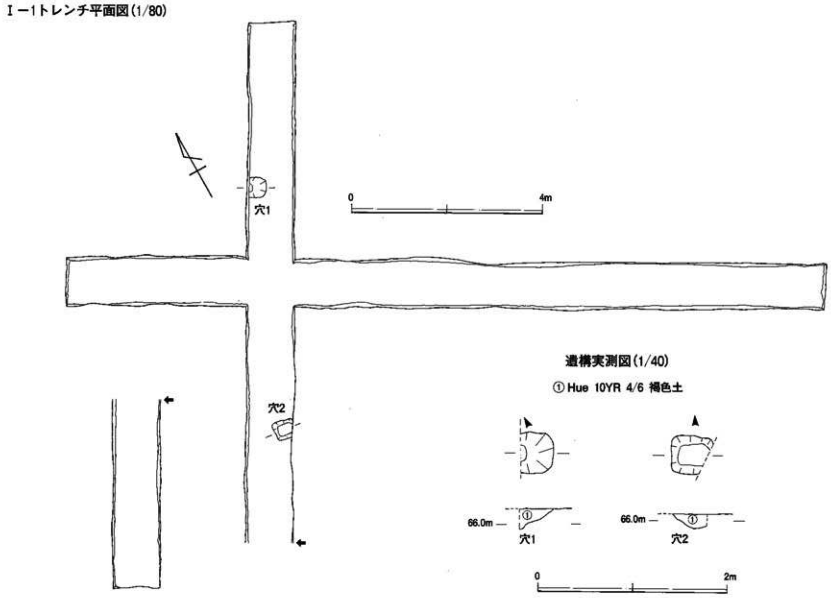
１は穴３東側の表土から出土した中世土師器皿の体部破片である。胎土に白砂粒と海綿骨片を含み色調はにぶい橙色を呈する。

２は穴11第３層暗褐色砂質土から出土した漳州窯産染付碗の底部破片である。白濁した釉が掛けられ、二重円と四本足動物の文様がある。16世紀第４四半期のものであろう。



第４図　中村城跡トレンチ配置図（1/500）

第５図　中村城跡トレンチ(1)



第6図　中村城跡トレンチ(2)

Ⅰ－1トレンチ南壁(1/80)

Ⅰ－1トレンチ　①Hue 10YR 2/2 黒褐色土
②Hue 10YR 4/4 褐色土
③Hue 10YR 6/4 にぶい黄褐色土

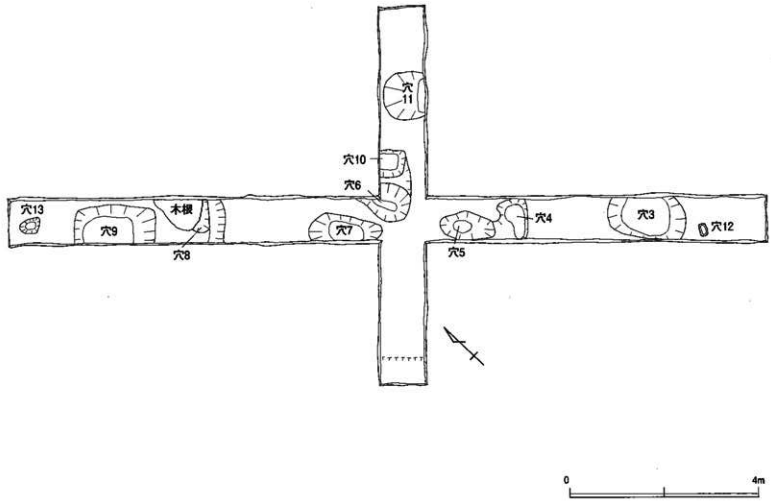
Ⅰ－1トレンチ東壁(1/80)

Ⅱ－1トレンチ西壁(1/80)

Ⅱ－1トレンチ　①Hue 10YR 2/3 黒褐色土
②Hue 10YR 4/6 褐色土
③Hue 10YR 6/8 明黄褐色土

第7図　中村城跡トレンチ(3)

Ⅰ－2トレンチ平面図(1/80)



第８図　中村城跡トレンチ(4)

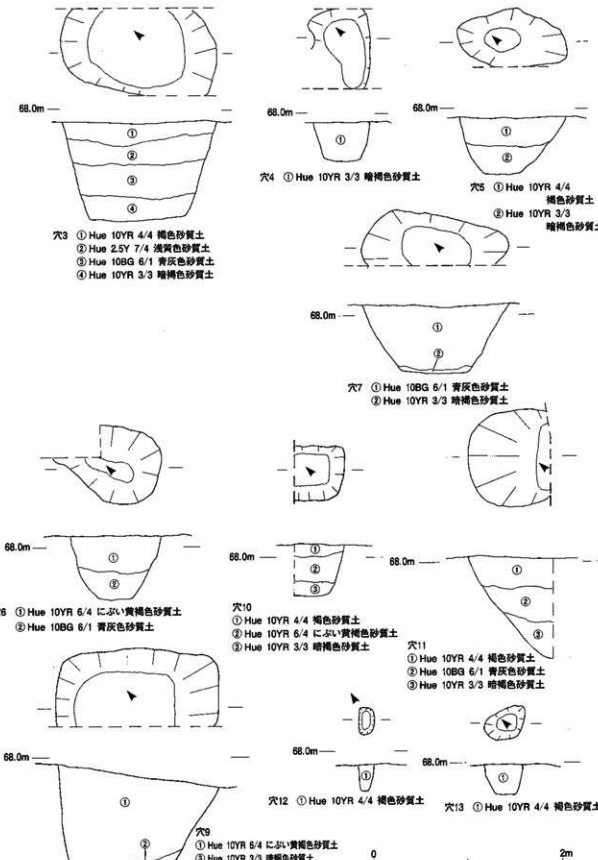
Ⅰ－2トレンチ北面(1/80)

Ⅰ－2トレンチ北面(1/80)

Ⅰ－2トレンチ東面(1/80)

Ⅰ－2トレンチ西面(1/80)

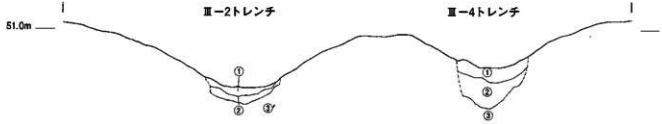
① Hue 10YR 3/2 黒褐色土
② Hue 10YR 8/4 浅黄橙色岩盤



第9図　中村城跡トレンチ(5)　Ⅰ−2トレンチ遺構(1/40)

Ⅲ地区東面(1/80)

① Hue 10YR 3/2 黒褐色砂質土
② Hue 10YR 5/3 にぶい黄褐色土
③ Hue 10YR 8/1 灰白色泥岩
　Hue 10YR 8/8 黄褐色泥岩
③′ Hue 10YR 7/1 灰白色シルト土



Ⅱ－1トレンチは、E郭中央に設定した。ここは大手通路を正面下に見下ろす位置にあり、防禦上重要な位置を占める郭である。

調査の結果、表土から深さ30cm前後で明黄褐色の地山を検出したが、遺構・遺物とも確認されなかった。

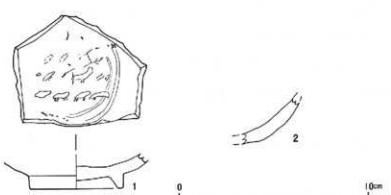
Ⅲ－1・2トレンチは、竪堀8に、Ⅲ－3・4トレンチは竪堀7に設定した。畝状竪堀群の堀底にトレンチを設け、深さや形状を確認することを目的とした。

調査の結果、1～3トレンチは表土から深さ約35cmで地山を検出し、4トレンチでは深さ85cmで地山を検出した。地山は2トレンチ部分では灰白色シルト土、他は灰白色又は黄褐色の岩盤である。

1～4トレンチとも、遺物は出土しなかった。

注

1　等高線に直交する形で築かれた竪堀を連続させる防禦施設（福島2009）。畝堀、畝状竪堀などとも呼ばれるが、本書では畝状空堀群で統一する。



第11図　中村城跡出土遺物（1/2）

第４章：森寺城跡の調査成果

第１節：既往の調査

森寺城跡（中世史料では「湯山」と記される）は、「森寺村古城」として近世以降も記録され、氷見を代表する山城になっている。

氷見高校歴史クラブが『故郷の城址』（氷見高校歴史クラブ1961）で主要部の略測図を添えて紹介した後、児島清文氏が史料や縄張り、さらには地名を元にして城を地域史の中に位置づけており（児島1977）、能登畠山氏の支城として築かれ、その後上杉謙信、次いで佐々成政の支城になったという基本的な流れがおさえられた。

その間、昭和48年１月30日に氷見市指定史跡となり、その後森林公園として主要部が整備され、市民の憩いの場となっている。

しかし、整備が農林・観光部局により行われたこと、史跡指定が城の中心部のみにとどまること、城全体の範囲・縄張りが確定していないことなど、いくつかの問題点があった。

その後、佐伯哲也氏が縄張図を公表し（佐伯1993）、城全体の構造がほぼ窺えるようになると、改めて森寺城跡を見直したいという気運が地元でも高まった。

そこで氷見市教育委員会では、平成７年度から地元や高岡徹氏の協力を得て、森寺城跡全域の調査を開始し、初年度に地名や縄張りの確認を行った後、平成８～13年度に測量調査を実施した。これは城の全域を対象とし、縮尺500分の１の平面図を作成したものである。

さらに測量の補足調査として、平成８・９年度（氷見市教委2000）と平成13年度（氷見市2002）に試掘調査を実施している。

平成８・９年度の調査は、搦手口地区と三角点地区、本丸・二の丸地区の三ヶ所で実施した。

搦手口地区の調査では、二ヶ所の堀切についてその形状を確認し、堀底が現状よりも1.5mほど深く、断面も主にＶ字型になることを確認した。

三角点地区では、石垣を伴った土塁の調査を行い、栗石（裏込石）の存在を確認した。

本丸・二の丸地区では、土塁の構造について土層や石垣石・栗石の状況を確認した。また、土塁内部に土留めのための石組みのあることが判明した。また、土塁の外側において空堀を検出した。

平成13年度の調査では、二の丸大手口横で確認された空堀の経路・形状を確認した。

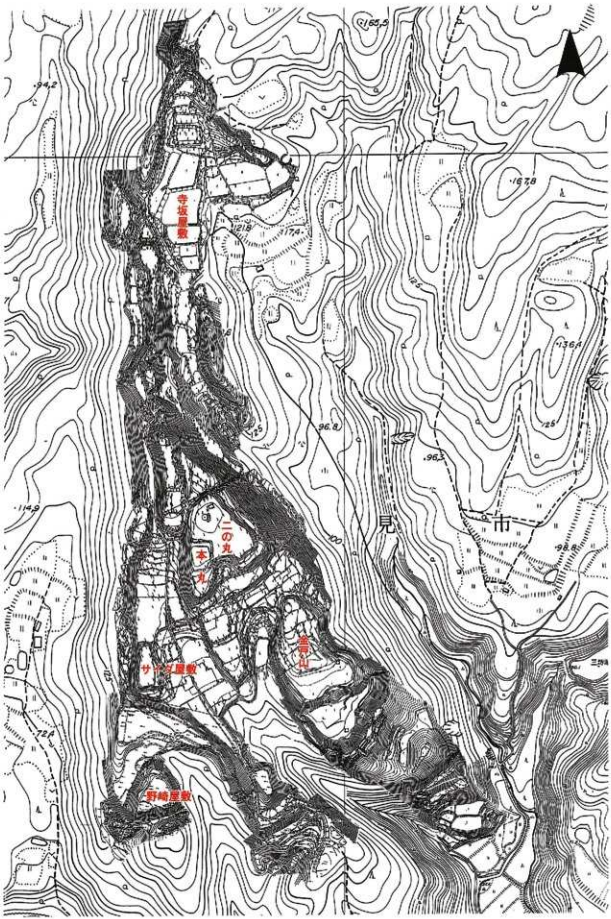
これらの調査で、白磁、中世土師器、中世珠洲、中世越前、中世瀬戸美濃、近世陶磁器、近世越中瀬戸、鉄製品（釘など）、不明銅製品が出土している。量的にまとまっているのは、中世土師器皿であり、ほとんどが16世紀、中でも後半～末のものが主体である。

また、平成８・９年度調査の過程で、地元坂井源吾氏が所蔵する城内出土銅銭の提供を受けた。これらの銅銭は、大正年間に坂井氏の父信義氏が、城跡北部の寺坂地内で水田畦修復中に、容器のない銭の塊を発見したものであり、うち状態の良い12枚を持ち帰ったものである。

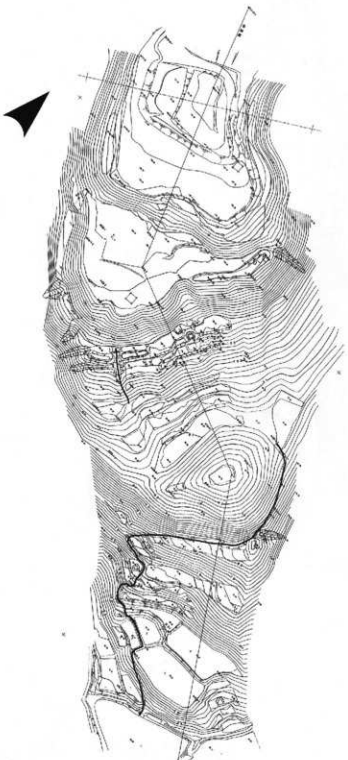
これらの調査により、地表調査では確認が困難な埋もれた遺構の確認、石垣構築の特徴、遺構の存続時期などについて、新たな知見を得ることができたのである。

これらの成果を受けて高岡徹氏が森寺城跡についてまとめを行っている（氷見市教委2001）。

一方、富山県では平成12～17年度の６ヵ年にわたって、中世城館遺跡総合調査が実施され（調査主体は富山県埋蔵文化財センター）、平成14年度には調査の一環として、同調査専門部会委員の千田嘉博氏



第12図　森寺城跡平面図（1/5000）



第13図　森寺城跡平成21年度測量地区平面図（1/2000）　実線は現状で確認できる山道

が森寺城跡を訪れた。この調査の折に二の丸へ登る通路について、千田氏から現状の遊歩道は土塁の上を通っており、実際の通路は一段低い部分ではないかという指摘を受けた。

市教委ではこの指摘を受けて、平成16年度に試掘調査を実施した。これが今回第３節で報告する調査である。

また、平成15年には地元山口納夫氏から、金戸山南側において新たな遺構を発見したと知らされた。この部分について、平成21年度に追加測量を行った。

なお、平成15～17年の三ヵ年の秋に、地元森寺地区が主体となって、ふるさと活性化イベント「湯山城戦国物語」が開催された。現地見学会、地元小学生による入城行進、獅子舞などの地元芸能などが城跡で行われ、森寺地区の西念寺では講演会や出土資料展示、特産品販売などが行われた。天候に恵まれなかった年もあったが、多くの人が訪れ、盛大な催しとなった。

第２節：測量調査

金戸山は森寺城跡南郭の三つの尾根のうち、最も東郭の尾根にあたる。今回測量を行ったのは、この金戸山の南側登り口である。

南端の標高42.02mの水田畦道から水田跡の段々を標高70m地点まで登ると、前方には急斜面が立ちふさがり、東側に向けて犬走り状の緩い登りのテラスが続く。その先には左側の急斜面と右側の土塁状の地形に挟まれた門状の入口があり、抜けるとさらに竪堀によって防禦されている。標高99.45mの小山状地形の裾をめぐると、幅10mほどの平坦な谷に到達する。この谷の西側を登ると、土塁と竪堀によって構成された入口に至る。

自然地形を残しながらも、谷から金戸山に登る通路があり、要所要所で防禦が施されていることが明らかになった。

第３節：平成16年度の発掘調査

二の丸へ登る大手道の経路と構造を確認するため、2004－１トレンチと2004－２トレンチの二ヶ所を設定し、発掘調査を実施した。調査期間は10月１日～11月26日（実働10日間）である。調査面積は、１トレンチが４㎡、２トレンチが７㎡、計11㎡である。

なお、調査参加者は次の通りである。

調査担当者：大野究（水見市教育委員会生涯学習課主査）

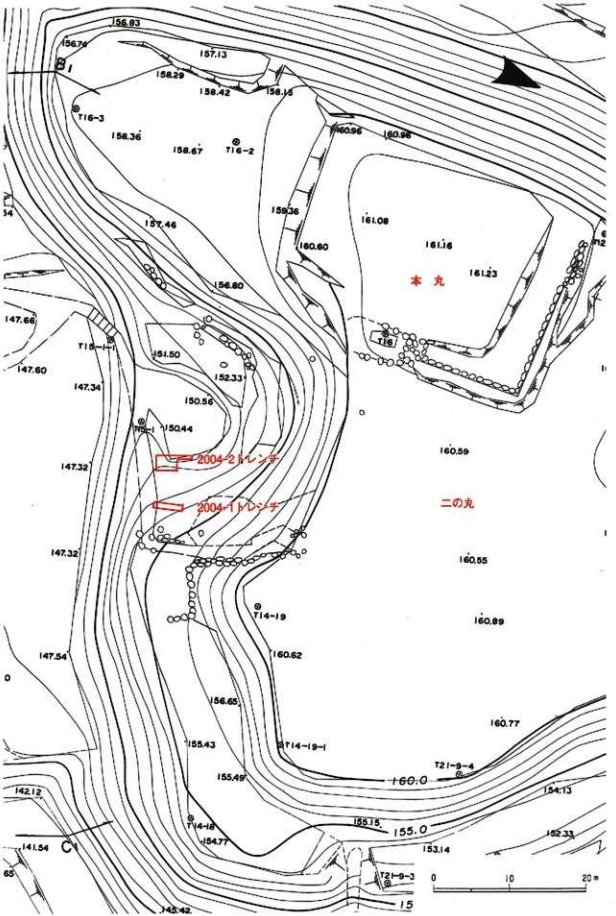
調査作業員：山本潔・山崎文夫（以上、水見市シルバー人材センター）

調査協力者：池田ひろ子・伊藤剛士・岡島玲子・久慈美咲・黒木甫・小林高太・小林智海・佐藤浩志・徳井恵子・栃堀哲彦・用田聖実（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）

１トレンチは二の丸への登り口途中、標高153m付近に設定した１×４mのトレンチである。トレンチ南側では表土上に石列が一部露出しており、またピンポールで石敷の存在が予測できた場所である。

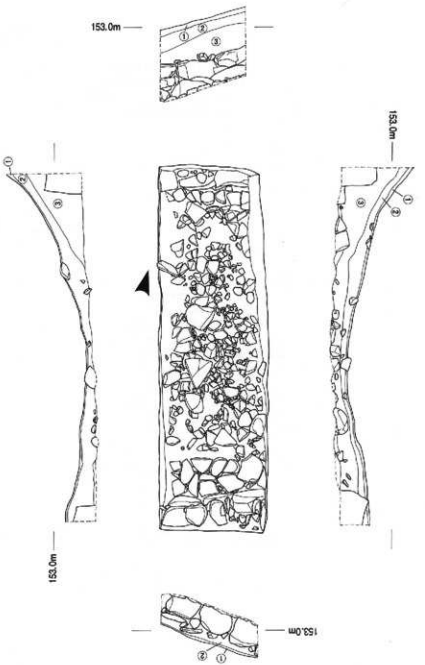
表土を除去したところ、調査区南側で最下段が遺存した石垣と側溝が、北側で二段に積まれた石垣と石列が、両者の間で石敷が確認できた。

南側の石垣は、20×40cm程の自然石を使用し、裏側には拳大の裏込栗石が認められる。また、石垣石の上には隙間に入れられた詰め石とみられる石材がのっており、二段以上に石垣が積まれていたと考えられる。



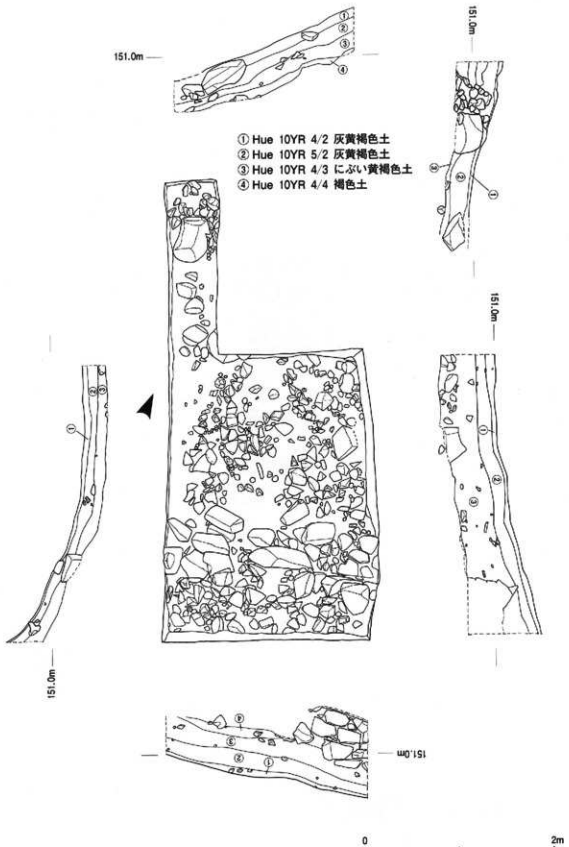
第14図　森寺城跡トレンチ配置図（1/500）

2004－1トレンチ



第15図　森寺城跡トレンチ(1)　(1/40)

2004−2トレンチ



第16図　森寺城跡トレンチ(2)（1/40）

側溝は、比較的平らな自然石を一重に敷き並べ、幅36～38cmに揃えるように石を割っている。最下段石垣石の底部ラインと側溝上部レベルが合うように揃えられている。反対の石敷側にはとくに造作はなく、水が流れる凹型の構造にはなっていないが、意識的に道の端に作られた遺構であるため、側溝としておく。石垣と側溝の水平に対する角度は20°である。

北側の石垣も南側と同様に20×40cm程の自然石を使用し、裏側には拳大の裏込栗石が認められる。石垣石は二段遺存しているが、上部に詰め石とみられる石材がのっており、三段以上に積まれていたと考えられる。北側に側溝は認められないが、石垣前面に拳大の自然石が一列に並べられている。北側石垣と石列の水平に対する角度も20°である。

石敷は拳大の自然石が不規則に一重敷き詰められており、地点によってはまばらになっている。その上に石垣石とみられる石材がところどころに散乱している状態である。

石敷の幅（側溝北端から石列南端まで）は2m65～68cm、北側石垣前面と南側石垣前面の距離は3m20cmである。

2トレンチは、本丸・二の丸の切岸下に設けられた小平坦面から二の丸に登り始める地点に設定し、標高は約150mである。2×3mに設定したのち、2×0.5mのサブトレンチを追加した。

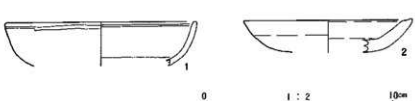
調査区南側で、1トレンチから続く石垣と側溝を確認した。石垣と側溝の造作は1トレンチ部分と同じであるが、石垣は三段目が遺存していた。しかしトレンチ西側の登り口に近い部分の石垣は、ほとんど崩され、石垣石と裏込栗石が散乱している。石垣と側溝の水平に対する角度は20°である。

サブトレンチは1トレンチで得た道幅の成果を2トレンチでも確認するために設定し、地表に見えていた石が北側石垣石であることと、裏込栗石を確認した。ただし、1トレンチで確認した石列は確認できなかった。

石敷を施した通路は長さ約1m単位で段々状になっている。ただし明確な階段ではなく、踏面と蹴上の区別は曖昧である。

2トレンチでの石敷幅は約2m53cm、南北石垣前面間の距離は約3.1mである。

遺物は2点図示した。1は2トレンチの崩された石垣中から出土した染付であり、皿E群に分類されるものである（小野1982）。口径12cmを測り、16世紀末のものであろう。2は1トレンチ西側で表採した中世土師器皿である。胎土に白砂粒を含み、明橙色を呈する。口径9cmを測り、手づくねで口縁端部はつまみ上げる。16世紀末のものである。この他に細片のため図示しないが、1トレンチ石敷から青磁碗の破片が出土している。



第17図　森寺城跡出土遺物（1/2）

第5章：まとめ

中村城跡は、上庄川中流左岸の丘陵上に築かれた山城であり、上杉謙信家臣である河田長親の与力、長尾左馬助が天正４～７年頃に在番した城と考えられる。

城の範囲は南北約350m、東西約400m であり、縄張りの特徴としては、次の点があげられる。

１：南の中村地区側から主郭に至る通路が城内を通ること。

２：切岸と堀切によって、各尾根からの経路が遮断され防禦されていること。

３：一部に畝状空堀群が設けられていること。

また、測量の成果を検討する中で、搦手の通路の存在が考えられ、北側の柿谷地区とも結ばれていたといえる。

発掘調査からは、Ａ郭とＢ郭で遺構を検出した。トレンチ調査のため十分な検討はできないが、Ａ郭の大型の穴は地山岩盤を穿った遺構であり、何らかの貯蔵用の穴ではないかと考えておきたい。なお、中村城跡では今のところ井戸の存在が確認できない。柿谷地区から清水を運び上げていたという伝承が地元にあり、そのルートとして想定できるのが搦手の通路である。もし伝承が史実を伝えるものとすれば、Ａ郭の穴の一部は水だめとして利用された可能性もあろう。

Ｂ郭で確認した穴は、柱穴の可能性があり、掘立柱建物の存在が推定される。

また、わずかであるが出土遺物があり、時期的には16世紀第４四半期と考えられ、これまでの知見を裏付ける結果となった。

森寺城跡は、新たに確認された金戸山南側の遺構を測量し、南側から金戸山に登る通路を確認した。この通路は自然地形を利用しながらも、要所要所に竪堀などを配したものになっていた。

一方、平成16年度の発掘調査では、石垣・石敷・側溝をそろえた幅約３m の通路を確認した。この通路は森寺城で最も大きな石が使われている石垣の前を通り、二の丸へ至るものであり、大手道と評価してよいものである（第19図）。このような大手道を備えた中世山城では、規模が違うものの安土城があり、森寺城の大手道は周囲の石垣とともに天正９年頃、佐々成政による改修によって設けられた可能性が高い。

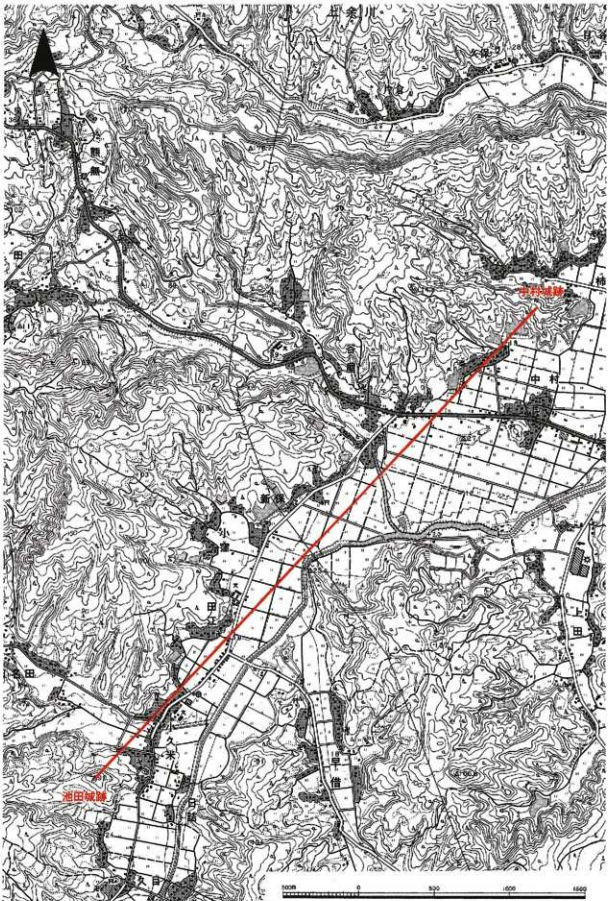
また、特に登り口において、石垣が崩されている状況は、森寺城において城わりが実施されたことを示しており、歴史的にみるとそれを行ったのは前田利家と考えられる。

森寺城跡中心部の石垣を主体とした遺構は、織豊系城郭の地方への伝播を知る上での一例として貴重なものであると位置づけできよう。

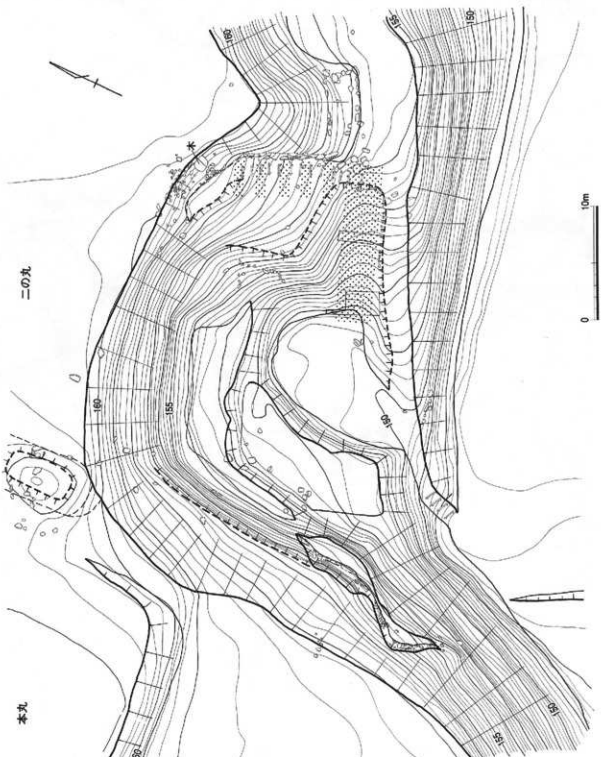
中村城が大手を向ける中村地区は越中と能登を結ぶ臼ヶ峰往来が通る場所である。上杉方が中村城を番城としたのは、こうした交通の要衝であった点が大きな要因のひとつであろう。

ところで、中村城の約４km 南西に池田城があり、中村城からも遠望できる（第18図）。戦国末期の池田城主は能登畠山氏に属していたが、天正４年の上杉謙信越中制圧時には、城主であった小浦一守の男子を人質として謙信の元へ差し出し、上杉方として行動していた（「松原系図」）。

中村城の立地要件のひとつとして、このような立場にある小浦氏を監視しつつ、一方で連携を図るという目的があったのではないだろうか。



第18図　中村城跡と池田城跡

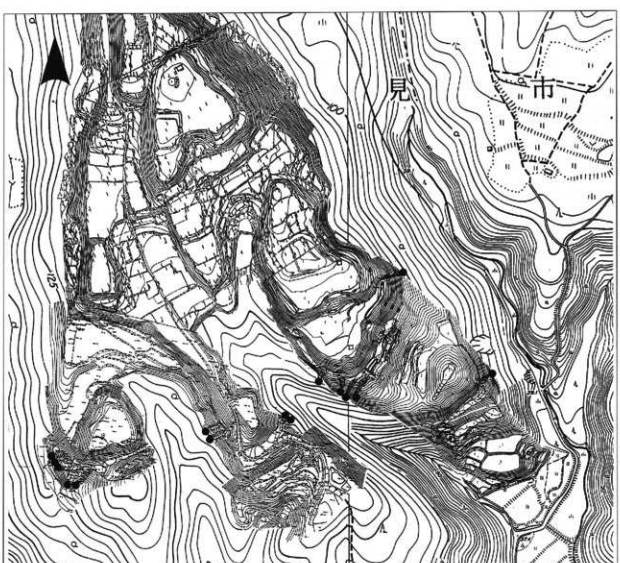


第19図　森寺城跡大手道想定平面図

中村城跡Ⅲ地区の畝状空堀群では、調査により堀の断面がU字型で現状と比べてもあまり深くならないことが判明した。畝状空堀群といっても、鋸歯状に竪堀が密接し、堀断面が深くV字型を呈するものと違い、中村城例は竪堀間の間隔がやや広く、断面も緩く浅いタイプといえる。また、竪堀の数も2～3本単位であり、城内にはこの他に単独や尾根をはさんで対に設けられるものもある。

このような竪堀のあり方は、中村城と同じく一時期上杉方の番城として使用された森寺城の南側防御ラインにも見られるものであり（第20図）、両者に共通する要素がある可能性があろう。

これまで森寺城跡の遺構は、最終段階の佐々成政期のものとして論じられることが多かった。むろん石垣が導入された中心部についてはその理解でよいと考えるが、中村城の調査を通してみると、上杉方時期の遺構が遺存する可能性も指摘できるのではないだろうか。



第20図　森寺城跡南側の竪堀（1/4000）　●印が竪堀

参考文献

奥村秀雄　2002 「氷見の溜池」『氷見春秋』第45号

小野正敏　1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№2

熊無村史編集委員会　1997 『熊無村史』

佐伯哲也　1992 「氷見市中部の城郭について」『氷見春秋』第26号

佐伯哲也　1993 「氷見市内の城郭（1）森寺城址」『氷見春秋』第28号

佐伯哲也　2006 「森寺城跡の構造から読み取る改修年代について」『氷見春秋』第53号

佐伯哲也　2008 「縄張りから読み取る中村山城の歴史について」『氷見春秋』第57号

高岡徹　2000 「戦国期における上杉氏の越中在番体制とその展開」『金銀山史の研究』高志書院

高岡徹　2003 『湯山城戦国物語』

富山県教育委員会　2009 『とやまのお城』

富山県埋蔵文化財センター　2006 『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』

新潟大学人文学部民俗学研究室　1997 『柿谷の民俗』新潟大学民俗調査報告書第3集

氷見高校歴史クラブ　1961 『故郷の城址』

氷見市　1998 『氷見市史』3資料編一　古代・中世・近世（一）

氷見市　1999 『氷見市史』9資料編七　自然環境

氷見市　2002 『氷見市史』7資料編五　考古

氷見市　2006 『氷見市史』1通史編一　古代・中世・近世

氷見市教育委員会　1993 『県指定史跡阿尾城跡』

氷見市教育委員会　2000 『森寺城跡』

氷見市教育委員会　2001 『氷見の山城』

氷見市教育委員会　2003 『飯久保城跡』

氷見市教育委員会　2005 『千久里城跡』

福島克彦　2009 『畿内・近国の戦国合戦』吉川弘文館

湯山城戦国物語実行委員会　2005 『湯山城戦国物語2005』

図　版

(1) 中村城跡遠景（西から）

(2) 中村城跡空中写真（上が北）

(1) Ⅰ−1トレンチ（西から）

(2) Ⅰ−1トレンチ穴1（南から）

(3) Ⅰ−1トレンチ穴2（北から）

(4) Ⅰ−2トレンチ（南から）

(5) Ⅰ−2トレンチ（北から）

(1) Ⅰ−2トレンチ（東から）

(2) Ⅰ−2トレンチ（西から）

(3) Ⅰ−2トレンチ穴3（西から）

(4) Ⅰ−2トレンチ穴11（北から）

(5) Ⅰ−2トレンチ穴6・10（西から）

(6) Ⅰ−2トレンチ穴10（西から）

図版4　中村城跡

(1) Ⅱ－1トレンチ（北から）

(2) Ⅱ－1トレンチ（南から）

(3) Ⅱ地区(E郭)から南方を望む　中央奥左寄りの丘陵頂部が千久里城跡

(1) Ⅲ－1トレンチ（西から）

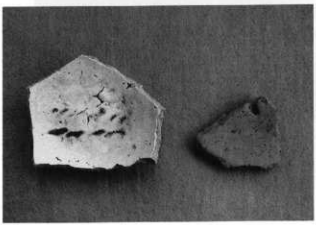
(2) Ⅲ－2トレンチ（西から）

(3) Ⅲ－3トレンチ（西から）

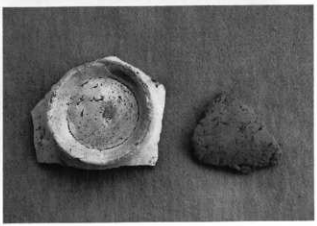
(4) Ⅲ－4トレンチ（西から）

(5) 作業風景（Ⅰ地区・東から）

(6) 作業風景（Ⅲ地区・北から）



(7) 出土遺物（内面）

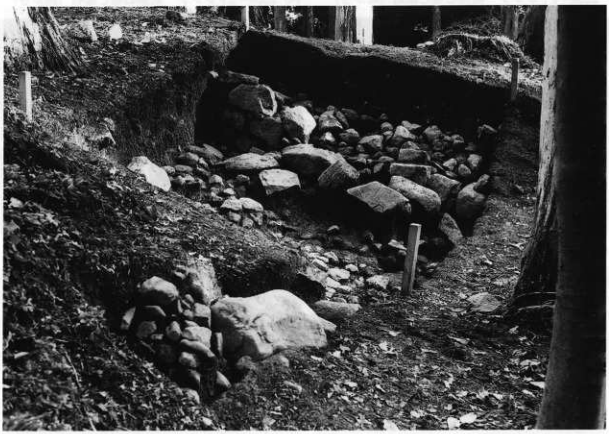


(8) 出土遺物（外面）

(1) 大手道の石垣（西から）

(2) 調査区遠景（北から）

(1) 2004−1トレンチ（西から）



(2) 2004−2トレンチ（北から）

(1) 2004−1トレンチ　南側の石垣と側溝（北から）

(2) 2004−1トレンチ　北側の石垣と石列（南から）

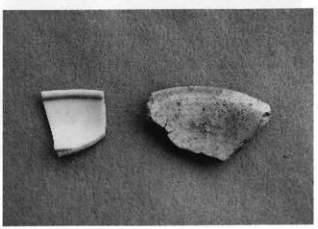
(3) 2004−2トレンチ　南側石垣と側溝（北から）

(4) 2004−2トレンチ　北側石垣と栗石（西から）

(5) 2004−2トレンチ　石敷と南側石垣（北から）

(6) 2004−2トレンチ　石敷（南から）

(7) 出土遺物（外面）



(8) 出土遺物（内面）

報告書抄録

ふりがな	なかむらじょうせきいち・もりでらじょうせきに
書名	中村城跡Ⅰ・森寺城跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第56冊
編著者名	大野　究
編集機関	氷見市教育委員会
所在地	〒935-0016　富山県氷見市本町４番９号　TEL 0766(74)8215
発行年月日	2010年３月19日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
なかむらじょうせき 中村城跡	ひみしなかむら・あいだに 氷見市中村・相谷	16205	033	36° 52′ 20″	136° 55′ 52″	20090626 ～ 20090806	76㎡	分布調査 （測量の補足調査）
もりでらじょうせき 森寺城跡	ひみしもりでら 氷見市森寺	16205	019	36° 54′ 30″	136° 57′ 45″	20041001 ～ 20041126	11㎡	分布調査 （測量の補足調査）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中村城跡	城館	中世 （戦国期）	穴・竪堀	中世土師器 染付（青花）	主郭部で穴等の遺構を確認。畝状空堀群の断面を確認。
森寺城跡	城館	中世 （戦国期）	石垣・石敷 側溝・石列	中世土師器 染付（青花）	石垣・側溝・石敷きをそなえた幅約３ｍの大手道を検出。城わりの状況も確認。

要約

中村城跡は上庄川中流域に築かれた戦国期の山城であり、上杉方の長尾左馬助が在番したと伝わる。平成19・20年度の測量調査の成果を受けて主郭と畝状空堀群の一部について試掘調査を実施した。主郭部では穴を多数検出し、堀立柱建物や貯蔵穴の存在が推定される。畝状空堀群は、間隔が広く、堀底の浅いタイプであり、今後同種の遺構との比較研究をする上での基礎データを得ることができた。

森寺城跡は阿尾川中流域に築かれた戦国期の山城である。能登畠山氏によって築かれたのち、上杉謙信・佐々成政の支城となった。平成21年度は、未測量であった金戸山南側地区の追加測量を実施した。また平成16年度の試掘調査では、石垣・側溝・石敷をそなえた幅約３ｍの大手道を検出し、城わりの様子も確認できた。

平成22年3月15日印刷
平成22年3月19日発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第56冊

中村城跡Ⅰ・森寺城跡Ⅱ

編集・発行　氷見市教育委員会
〒935-0016
富山県氷見市本町4番9号
☎0766（74）8215
印　　刷　能登印刷株式会社

この調査報告書は高精細なハイファイン印刷(FMスクリーン方式)で製作されています。

氷見市中村城跡

中村城跡平面図

縮尺　1/1,000

氷見市教育委員会作成